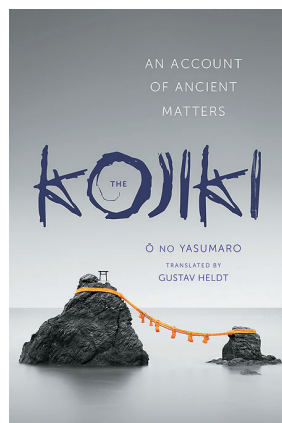


ギユスターヴ・ヘルト訳
『古事記』Gustav Heldt, trans., *The Kojiki: An Account of Ancient Matters*.
New York: Columbia University Press, 2014.

福田武史



『古事記』の英訳といえば、バジル・H・チェンバレン (Basil H. Chamberlain, trans., *The Kojiki: Records of Ancient Matters*, 1883) とドナルド・L・フィリップ (Donald L. Philippi, trans., *Kojiki*, 1968) が双璧であるということに異論はないであろう。前者は本居宣長『古事記伝』に代表される国学的研究の良き理解者 (および良き批判者) として、後者は比較神話学や戦後の『古事記』研究の良き理解者として、今なお参照に値する。

しかし、『古事記』研究は一九七〇年代から八〇年代を画期として大きく展開した。それまでは『古事記』『日本書紀』等の古代の文献に見られる神話・歴史 (系譜や物語) の原型がいかなるもので、それがどのように現在見られるかたちに発展・成立したかを問う

ことに重点が置かれていたのに対し、西郷信綱氏らが端緒を開いた作品論的研究は「古事記を内的構造を有する一つの作品として取扱うことによつてその本質を根源的に説明しようとする」¹⁾ものであった。いいかえれば、『古事記』全体を貫く世界観あるいは論理はいかなるものであったか、その論理のもとで神話や歴史的事物はどのように語られているのかということの究明を目指す立場だといえよう。

八〇年代以降に『古事記』の作品論的研究を厳密に推し進めたのが神野志隆光氏である。『古事記の世界観』(吉川弘文館) をはじめとする一連の研究は学界に大きな影響を与え、作品論的理解という立脚点に基づいて『古事記』全体を読み通した新編日本古典

文学全集『古事記』（小学館。山口佳紀氏との共著。以下、新編全集本）は二十世紀末におけるその到達点を示すものであった。『古事記』成立以前や『古事記』の外側にあつた「口承」の世界を想像すること、あるいは、『日本書紀』などの別の神話・歴史テクストが語る文脈を持ちこんで解釈することを極力排して『古事記』そのものの理解を目指したのである。現在の日本における『古事記』研究はこの新編全集本を出発点としているといつても過言ではない。

このたびのギユスターヴ・ヘルト氏の英訳本はその翻訳を新編全集本に依拠した（序文・p. x）と明言していたために、本書がフィリッピ訳以降の欠を補い、現在の『古事記』研究の水準を英語圏の読者に示すものとなつてはいるはずだと期待していた。しかし、実際にはその期待に十分に応えたものとはいえなかつた。理由は明確である。注釈が一切付されていないのである。

前述した通り、作品論的研究というのは、個々の神話的・歴史的物語が『古事記』全体の世界観・論理のもとでどのような意味を持つているのかということ問うものであつた。つまり、「全体が部分に遍在することを片時も忘れてはなるまい」（西郷信綱『古事記注釈』）という態度である。だとすれば、個々の物語が全体のなかでどのように意味づけられるのかという説明は必要不可欠なものであつて、それがなければ作品論的理解を示したことはならないであらう。

たとえば『古事記』冒頭の「天地初発之時、於高天原成神名……」の部分で本書は、“When heaven and earth first appeared, the names of the spirits who came about in the high plains of heaven are these:” (p. 7) と訳す。「発」を「現われた」(appeared) とするのは新編全集本の理解にもとづくわけだが、この冒頭部の表現について新編全集本は頭注で、

「天地初発之時」という書き出しは、『記』序文や『書紀』が中国の陰陽論に基づいて天地の始まりを述べるのとは異なる。たとえば、『書紀』神代上の冒頭が、混沌から陰陽分れて天地となるというのに対して、どのようにして天地となつたかには触れることなく、ただ、天と地とが始まつた時に、とだけいうのが、この書き出しである。天地の始まりそのものは述べず、その始まりの時に高天原に神々が現れたことから述べるのである。³⁾

と詳細に述べ、また、

「初発」は天地として始り動きだしたことをいう。漢籍の陰陽論的創世表現を避けて選ばれた。

と指摘する。このことを注釈もなくことばを英語に置き換えただけで読者に的確に伝えることができるのか甚だ疑問である。

さらに、このように無条件に成立した天と地のなかで、天に神が誕生し、地は「多陀用弊流」（ただよへる）状態であったことが『古事記』全体の世界観・論理に結びつくものとして新編全集本では以下のように説かれている。

アメノミナカヌシからイザナキ・イザナミに至る神が出現し、イザナキ・イザナミが、これら天神の命を受けて地に降つて、「ただよへる」だけの、つまり世界以前の状態のそれを世界として作り上げる。「国」（地上世界）の側は、その内部から世界となることを可能にするものではないのである。高天原の働きによつて初めて世界たりうる。その世界生成が『古事記』上巻の主題なのである。高天原の神の出現について初めに述べることは、天の世界を語るのではなく、地上世界が、高天原のもとに成り立つこと——天の世界・高天原が成り立たせる地上世界・葦原中国——を語るためなのである。⁴

イザナキ・イザナミの国作り、オホクニヌシとスクナビコナの国作り、そして天神の命を受けてニニギが降臨して地上世界の主となるという一連の物語が、地上世界を成り立たせる高天原とい

う一貫した論理のなかで理解される（注釈を通じてそれを確認していく）わけだが、この解説が読者に提供されなければ翻訳を新編全集本に依拠した意味はないであろう。

なお、本書に注釈はないが、それに代わるものとして巻末に「用語集」(Glossary) が付され、普通名詞および固有名詞（人名・地名）についての解説がある。しかし、これも不十分なものが目につく。たとえば「高天原」(High Plains of Heaven) については「大和王朝の先祖の神々が住んでいた空の国。その広大な空間は中央アジアのトルコ系文化に元があるかもしれない」(The land in the sky where the Yamato dynasty's ancestral spirits resided. Its vast open spaces possibly harken back to the Turkish cultures of Central Asia) (p. 251) と解説するが、上述したような高天原と地上世界の関係性に触れていないのは大きな問題があり、トルコ文化云々についての言及はあらずもがなだといわざるをえない。

また、『古事記』の「黄泉国」を the Underworld (地下) と訳すのは新編全集本からすれば明白な誤訳であり、用語集の解説で『根之堅州国』とも呼ばれる」(Also called "the land that lies beneath the hard earth's roots" (ne-no-kata-su-kuni) ...) (p. 268) とするのは新編全集本の解釈とは全く異なるものになってしまっている。新編全集本は「なお、黄泉国の在りかについて、地下とする説が有力だが、そのような徴証は認められない。葦原中国と同じ地上の側の世界であ

り、その世界とのかかわりにおいて葦原中国は成り立つ⁽⁶⁾とし、イザナキが「黄泉比良坂之坂本」に至った場面の頭注で『「ひら坂」を下つてきたところをいうのであり、黄泉国が地下にあるとはいえないことが明らかである。葦原中国は坂を下ったこちらに、黄泉国は坂の向こうにあるのであり、同じ地上の世界と受け取られる」と指摘し、黄泉国を地下とすることを否定している。

従来、黄泉国を地下とすることで、天上・地上・地下という、世界各地の神話に普遍的に見られる三層構造の世界を『古事記』もまた語っていると把握していたことに對し、神野志氏は先に見たように、天と地という二層(二元)構造の世界だと捉えるわけである。よつて、これは単に部分的な文脈の理解が異なるということとで済む問題ではなく、世界観という『古事記』全体の理解にかかわる問題なのであった。新編全集本の立場からすれば、当然のことながら「根之堅州国」も地下ではありえない(「『堅州』は表記通り堅い州(中州)という意。「根」を地下の意とする説には従いたい。地下だとすると州の説明がつかない⁽⁸⁾)。そもそも、新編全集本は黄泉国と根之堅州国は「世界としての呼称が違うのであり、それは別の世界であることを明示する⁽⁹⁾」として、同一の世界だとは認めていないのである。

たしかに、本書の序文では、「特に難解な箇所が投げかける疑問点」については、『時代別国語大辞典 上代編』、尾畑喜一郎編『古

事記事典』、荻原浅男・鴻巣隼雄校注訳『古事記 上代歌謡』、そして西郷信綱『古事記注釈』等を参照したと断つてはいる(すゝめ)。新編全集本が示した文脈理解については異論もあろう。しかし、テクストの根幹にかかわる部分に関して何も言明せずに解釈を變更して訳すのは学問的に真摯な態度とはいえず、無用の混乱と誤解を招くであろう。実は、ほかにも新編全集本の提示した有力な解釈を採用していない箇所があるが(たとえば、雄略天皇と赤猪子の歌のやりとりの場面など)、ここではその一つ一つをとりあげることはしない。新編全集本と常に読み比べる必要があることを本書の読者に注意しておく。

註

- (1) 西郷信綱「古事記研究史の反省——一つの報告」、『古事記研究』未来社、一九七三年。初出、一九六六年)、二八六頁。
- (2) 『古事記注釈 第一巻』(ちくま学芸文庫、筑摩書房、二〇〇五年。初刊、一九七五年)、二七頁。
- (3) 『古事記』(新編日本古典文学全集、小学館、一九九七年)、二八頁。
- (4) 同書、四一〇頁。
- (5) 日本語訳は評者による。ちなみに、本書は「高天原」を“Takama-ga-hara”⁽⁵⁾とよむが、『古事記』の訓注に即せば「たかあまのほら」とよむのが正しい。
- (6) 前掲『古事記』、四四頁。
- (7) 同書、四六頁。
- (8) 同書、五五頁。
- (9) 同書、五四頁。